

名詞の多義について—IPAL 名詞辞書のための研究から

本多 啓*

駿河台大学

桑畑 和佳子†

情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター

1 はじめに

情報処理振興事業協会で編集している『計算機用日本語基本名詞辞書 IPAL (Basic Nouns)』では「区分間の意味的關係」として、個々の名詞についてその多義の構造を記述している。¹ 多義とは互いに関連のある複数の意味²が同一の言語形式に結び付けられていることを言う。名詞の多義を支える原理としては比喩(メタファー・メトニミー・シネクドキー)がよく知られており、『名詞辞書』でもこれに着目する形で記述を進めてしてきた[9][10]。これは非常に有効なアプローチであるが、問題もある。比喩によるアプローチは基本的に、語の指示対象のずれを指示対象間の関係の問題として取り扱うものである。そのため、ほぼ同一の指示対象を持ちながら、それに対する話者の捉え方が異なるために別区分として認定されている場合や、異なる指示対象に対して同一の捉え方を適用していることが単一語の多義という形をとって現れる場合を適切に扱うことができない。これらについて、以下、例に即して検討する。³

2 認知枠の違いによる多義

2.1 人を表す語

人は生物であると同時に、社会を構成し、文化を産み出す主体でもある。人をどちらとしてみるかによって、人概念は異なったものとなる。そこで、名詞「人」は複数の、同一の対象を指示する意味をもつことになる。

(1) 01 哺乳類霊長類目ヒト科に属する生物。⁴ 原始時代の人の化石が発見された。

02 高等な知識を備え、文化を生み、社会を形成する存在としての「ひと01」世の中には色々な人がいる。

これらは、人というものに生物としての側面と社会的・文化的な存在としての側面があり、(1)の例はそれぞれの側面を指している、と考えればメトニミーの例となるが、人そのものを生物学的な存在としてみるか、社会・文化的な存在としてみるかの違いと考えれば、同一の対象に異なる認知枠を適用した結果として生じた多義ということになる。『名詞辞書』では実質的に後者の立場を採用している。

(2) 01 は 02 を特定の見方(生物学的見方)で捉えているもの。

「男」(3)は生物学的な存在としても(01)、社会的な存在としても(02)、また「女」と性的な関係を取り結ぶ存在としても(03)了解することができる。⁵ 「女」も同様である。

(3) 01 人間の性別のうち、精子をつくる器官をもっている方。俺だって、好きで男に生まれてきたわけじゃない。

02 成熟した、一人前の男性。あいつもやっとなん前の人になった。

04 性愛の対象としての男性。あの娘にはもう男がいるよ。

「からだ」(4)は、空間を占有する「物」としても(01)、また異性による性的な行為の対象としても(04)了解することができる。「肉体」にも同様の多義がある。

(4) 01 人間や動物の、頭・手足・胴など肉体部分の総体。あの人は体が大きい。

04 性的な対象としての「からだ01」。遊ぶ金欲しさに体を売ってしまった。

2.2 領域を表す語

領域を表す語にも、同一の対象に異なる認知枠を適用することによる多義がみられる。「土地」(5)、「地下」(6)がその例である。

⁵ 指示対象間の関係としては 02 の指示対象は 01 の指示対象の部分集合にあたり、それゆえシネクドキーである。

*情報処理振興事業協会技術センター WG 委員

†富士通株式会社より出向中

¹ 本稿執筆時点で、この作業は進行中である。なお、本多・桑畑は区分間の意味的關係の担当であるが、区分の認定と意味記述は担当していない。

² 『名詞辞書』の場合、同一の見出し語に複数の「区分」が与えられているときにその区分がこれに該当する。

³ 以下、認知言語学で用いられている術語を特に断りなく用いることがある。それらについて詳しくは [12][8] などを参照されたい。

⁴ 以下、『名詞辞書』の意味記述をゴシック体で示し、通常の字体で用例を添える。

(5) 01 (農地や宅地、山林など) 人が利用するものとしての大地・地面。土地を売って相続税を払う。

02 [文脈の中で特定される] ある地域や地方。この伝統芸能はこの土地に特有のものです。

02 は 01 の特定の範囲を文化的な単位として捉えたもの。

(6) 01 地面の下。電柱を地下に埋設する。

03 埋葬された故人が眠る場所として捉えた「ちか 01」。この知らせで、地下に眠る故人も喜んでくれると思います。

03 は、01 を特定の特徴を持った場所として捉えたもの。

この他に、「世界」「くに」「土」などにも同様の多義がある。

2.3 その他

以上のほか、自然物とみることと材料とみることが可能なもの(「石」(7))、家の構成要素としての夫婦の一方とみることと、単純に夫婦の一方とみることが可能なもの(「嫁」(8))などがある。

(7) 01 岩が風化したり流水の作用を受けたりしてできた、硬い鉱物質の塊。人にむかって石を投げてはいけな。

02 (建材など) 材料・材質としての「いし 01」。この橋は石でできている。

(8) 01 他の家に育ち、婚姻によりその家の一員となった女性。息子をとられた淋しさから嫁をいびる姑が多い。

02 ある人の配偶者で女性の方。(「嫁さん」という形で用いられる場合が多い。) 彼女はあの男の嫁になった。

3 イメージスキーマ変換

3.1 <連続体>、<複数個体>、<動く単一個体>

言語においては、<一次元性をもつ単一の連続体><複数個体><移動する単一個体>に対して同一の形式が適用されることがある。これは [3] などではイメージス

キーマ変換 (image-schema transformation) の例として処理されている。⁶

一次元性をもつ連続体から複数個体への変換の例として、「しっぽ」(9) を考察する。

(9) 01 動物のからだの尻から先細りに分かれた部分。主人をみつけた犬が大きく尻尾をふった。

02 ものの中心となるところからはなれた、末端の部分。たくあんのしっぽを捨てるのは勿体ない。

03 物や記号の列の一番端。列のしっぽに並ぶ。

(02) は一次元性をもつ連続体の末端であり、(03) は複数個体の末尾である。次の「しり」(02) から (04,05) への拡張も同様のメカニズムによると考えられる。

(10) 01 肛門やその付近の肉の豊かな部分。父は赤ちゃんの尻を軽くたたいた。

02 物の一番後ろの部分。車の尻がへこむ。

03 一連の局面の流れをもつ物事の、一番最後の時間その出し物はパーティの尻に回そう。

04 物や記号の列の一番後ろ。その人は、列の尻に

いる。

05 成績、順位などによる序列の一番下。私の成績は尻から五番目だ。

「すえ」(11) の (01) から (05) への拡張は、[時間軸上に存在する連続体の末端] から [時間軸上に存在する複数個体の末尾] へというイメージスキーマ変換を経ていると考えられる。

(11) 01 [連体修飾部で表される] ある時間的なまとまりの最後の方。今月の末にテストがある。

02 [連体修飾部で表される] ある物事の行われた結果。日本チームは激戦の末に 5 対 4 で敗れた。

03 ある人や組織などの将来。いい加減なところがあるので、この子の末が心配です。

04 [連体修飾部で表される] ある家系の末裔。彼は平家の末にあたる。

05 兄弟の中の一着年下であること。また、その人。私は 3 人姉妹の末に生まれました。

⁶[2] はこの場合のイメージスキーマ変換の認知的な基盤を次節で取り上げる主観的な運動に求め、異なる対象に対して同一の捉え方を適用した例としている。

06 ある物の中心から離れた、一番端の部分。とんぼが小枝の末に止まった。

07 重要でなく、取るに足りないこと。そんなことは末の末の問題だ。

一次元性をもつ連続体と移動する単一個体に同一語が適用された例としては、「合流」(12)、「先」(13)が挙げられる。

(12) 01 二つ以上の川の流れや道がある地点で一つになること。そこで阿武隈川と松川が合流する。

02 二つ以上の団体やグループなどがいっしょになること。山小屋で先発隊と後発隊が合流した。

(13) 02 ものの先端の部分。棒の先をまるめる。

09 移動の目標となる場所。鈴木さんの行った先に電話する。

3.2 end-point focus 1: 主観的な運動の終点

英語では物体の移動経路と物体の位置とに同一の語が用いられることがある(14)。ただしこの場合の「位置」は「移動経路の終点」と感じられるので、この多義はend-point focus現象と呼ばれる。[3]はこれもイメージスキーマ変換の例としている。その認知的な基盤については、認知主体の主観的な運動に求める見解が一般的である[4][7][6][1][2]。⁷

(14) a. Vanessa jumped across the table.

b. Vanessa is sitting across the table. [4]

このend-point focus現象が関わる多義の例に、「筋」(15)がある。

(15) 01 細長くつながっているもの。そのセーラー服の襟には赤い筋が二本ついている。

07 情報のよりどころ。確かな筋から情報を得る。

空間に存在する物理的な筋(01)の構造がメタファーによって、情報の伝わる経路に投射される。その経路から、end-point focus現象によって経路の終点に指示対象が移行する。さらにメトニミーによって、端点からそこに位置する人物に指示対象がずれたのが(07)である。

⁷ <経路>から<経路の終点>への拡張は、指示対象間の関係からみればメトニミーである。

3.3 end-point focus 2: 主観的な変化の終点

(16a)は実際の変化の結果を記述しているが、(16b)は、実際には部屋に変化が生じたわけではないにもかかわらず部屋のあり方を変化の結果であるかのように表現している。このような表現を、主観的な変化の表現と呼ぶ[5]。

(16) a. 角が擦り減って丸くなっている。

b. この部屋は丸くなっている。[5]

前節の(14)が移動の終点に焦点がおかれる現象であるとするならば、(16a)は変化の終点に焦点がおかれる現象であると言えることができる。

ある状態を仮想上の変化の結果として捉えるという認知操作は、名詞の多義にも反映している。例として「しる」(17)を考える。

(17) 01 ものの内部に含まれている水分。レモンの汁を魚のフライにかける。

02 味噌やしょう油などで味を付けられた湯や水を主とする料理。海の幸が入った汁をすする。

03 中に料理の材料をひたして味を付けるのに用いる液。煮る前に魚を汁に漬けておく。

『言泉』は、「しる」を次のように記述している。⁸

(18) 1 物体からしみ出る、または、しぼり取った液。

3 吸い物。すましや味噌汁。

2 料理に使われる出し汁。煮汁。つゆ。

4 略。(「うまい汁を吸う」に関する記述。)

すなわち、「しる」(01)は、物体から液体が出てその物体をおおう状態になる、という変化の概念が背後にある。一方、(02)の背後には液体が具ないし実をおおっているという状態の概念があり、(03)には液体が肉や魚をおおっているという状態の概念がある。(02)、(03)の意味構造にある状態は、(01)の意味構造にある変化の結果ないし終点の状態と同一である。したがって、(01)と(02)、(03)の関係は(16a)と(16b)の関係に並行していると言えることになる。

同様の現象は「しみ」(19)にもみられる。

(19) 01 液体が染み込んでできた汚れ。買ってきたばかりのブラウスに染みを見つけた。

⁸ 『名詞辞書』の区分の順序に合わせて語義の掲載順を変更した。

02 皮膚に生じる、茶色の斑点。頬にできたしみがいつの間にか消えていた。

(01) は文字通り液体が「しみ」込んだ結果できた変色を指すが、(02) においては染み込むという変化は生じていない。しかしながら (02) の記述する変色状態は (01) における変化の結果としての状態と類似の関係にある。

4 アフォードする用途の同一性

異なる対象がそのアフォード [11] する用途の同一性によって同一の言語形式で表されるようになることがある。その例として、「かさ」「窓口」⁹「ひ」を挙げておく。

(20) 01 杖の部分を手で持ち、頭の上で開いて用いる、雨や日光などを防ぐための道具。傘をさす。

02 雨や日光などを防ぐために頭の上のせるかぶり物。笠を編む。

(21) 01 (公共機関などで) 外部の人と接触するために設けられたところ。駅前に住民票交付の窓口を設ける。

02 外部とのつながりを付ける際にその橋渡しの役目をする人や組織。彼が交渉の窓口だ。

(22) 01 ものが燃えるときに生じる、非常に高い熱と光をとともうもの。火の不始末が原因でばやを出した。

02 料理など、物を加熱するために使うものとしての「ひ(火) 01」。鍋を火にかけた。

03 たばこをつけるための「ひ(火) 01」。火を貸してください。

06 あかり。夕方、この通りに灯がともる。

「ひ」(01)、(02)、(03) は上述の、同一の対象に異なる認知枠を適用した結果生じた多義の例に当たる。指示対象間の関係からはシネクドキーになる。(01) と (06) が、アフォードされた用途の同一性による拡張である。指示対象間の関係からはメタファーになる。

謝辞

本研究は『名詞辞書』のための基礎研究の一部であり、研究員、臨時 WG 委員、その他の諸氏の協力のもとになされたものである。とりわけ区分の認定と意味記述の執筆の責任者である鈴木高志氏との議論は啓発的であつ

⁹これらは指示対象間の関係からメタファーとすることもできる。

た。また、例文のほとんどは『名詞辞書』から取っている。本発表の内容に関する最終的な責任は本多と桑畑にある。

参考文献

- [1] HONDA, A. From Spatial Cognition to Semantic Structure: The Role of Subjective Motion in Cognition and Language, *English Linguistics*, 11 (1994), 197-219.
- [2] HONDA, A. Linguistic Manifestations of Spatial Perception (1994), Doctoral Dissertation, University of Tokyo.
- [3] LAKOFF, G. *Women, Fire and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago (1987).
- [4] LANGACKER, R. W. Subjectification, *Cognitive Linguistics*, 1, 1 (1990), 5-38.
- [5] MATSUMOTO, Y. Subjective Change Expressions in Japanese and Their Cognitive and Linguistic Bases, Spaces, Worlds, and Grammar (eds. Fauconnier, G. and Sweetser, E. E.), University of Chicago Press, Chicago (1996), 124-156.
- [6] MATSUMOTO, Y. Subjective Motion and English and Japanese Verbs, *Cognitive Linguistics*, 7 (1996).
- [7] TALMY, L. Fictive Motion in Language and "Cep-tion", Language and Space (eds. Bloom, P., Peterson, M. A., Nadel, L. and Garrett, M. F.), The MIT Press, Cambridge, MA. (1996), 211-276.
- [8] 河上哲作 (編) 認知言語学の基礎, 研究社出版, 東京 (1996).
- [9] 桑畑和佳子, 橋本三奈子 名詞の下位区分間にみられる意味的關係の辞書記述, 情報処理学会研究報告, 95-NL-110, 5 (1995), 29-34.
- [10] 桑畑和佳子, 本多啓 見出し語についての備考 (区分間の意味的關係), 計算機用日本語基本名詞辞書 IPAL (Basic Nouns) — 解説編 —, 情報処理振興事業協会, 東京 (1996), 210-227.
- [11] 佐々木正人 アフォードダンス: 新しい認知の理論, 岩波書店, 東京 (1994).
- [12] 山梨正明 認知文法論, ひつじ書房, 東京 (1995).